2026年（令和8年）
1月号（No. 968）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

インド・ヒマラヤに魅せられて
日本語版と英語版の山名事典を出版

東海支部　沖　允人

昨年末の年次晩餐会において、沖会員が「秩父宮記念山岳賞」を受賞された。受賞理由は「インド・ヒマラヤの研究と書籍の編集・出版」。1974年のインド滞在に始まって数々の登山隊に参加、その経験を基に2015年、主な山々を網羅した『インド・ヒマラヤ』を出版したが、日本はもとより世界でも初めての成果である。

このたび栄誉ある「秩父宮記念山岳賞」をいただき、大変光栄に思っている。実は私は、2025年1月に急性骨髄性白血病を発病し、余命1年から10年と宣告されている。この病気は、現代の医学では私のような90歳の高齢者には抗癌剤などの治療はできず、ただ精密な血液検査をし、見守り、血液の減少が分かると血液を1ヶ月1ℓ程度輸血し、命を支えている状態である。

同じ病気に罹（かか）られた50mバタフライのオリンピック選手・池江璃花子さんは19歳で発病されたが、1年間の闘病と生体移植を経て見事カムバックし、25年夏のシンガポール世界水泳選手権日本勢の主将を務められた。著書に『もう一度、泳ぐ』（文藝春秋）がある。

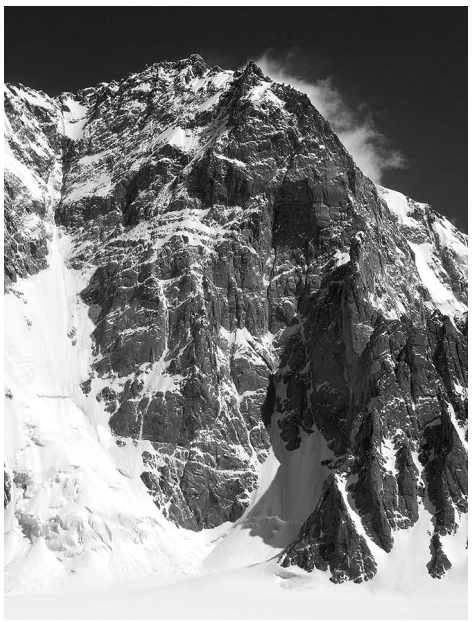
私の命は〝風前の灯〟といったところだが、大変名誉な受賞なので、病を押してこの小文をまとめた次第。

インド・ヒマラヤの山々のこと

私の勤務先のあった栃木県足利市から名古屋に転居し、日本山岳会栃木支部（当時の支部長は、マナスル最年少登頂者の日下田実（ひげたみのる）さん）から東海支部に所属変更した年は、日本山岳会創立110周年の2015年であった。

日本山岳会会長の任期を終え、東海支部に帰って来られた尾上昇支部長がおられ、支部員の鈴木常夫さんが中心となって10年ほど続いた東海支部のインド・ヒマラヤ登山の成果をまとめる本を、創立110周年記念事業に応募しようということになり応募、幸いに選定された。

私は1974年から1年半、イ


東部カラコルムのサセール・カンリⅡ峰南面

目　次

インド・ヒマラヤに魅せられて
日本語版と英語版の山名事典を出版 …1
現役学生だけで登山隊を編成
ピサン・ピーク全員登頂 ……4
山歩きを始めて50年
私家版『山岳展望図集 150山』を上梓 ‥6
登山YouTuberと登山ガイド、
二足の草鞋で山へ ……9
山の名著再読 ……10
東西南北 ……12
活動報告 ……13
図書紹介 ……14
会務報告 ……16
ルーム日誌 ……17
会員異動 ……18
INFORMATION ……18
新入会員 ……19
編集後記……19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月～金 ……10～20時
第1、第3、第5土曜日 ……10～18時
第2、第4土曜日 ……閉室
＊開室日の電話受付時間　10時～16時

2011年に初登頂したラダックのマリ峰

アルナーチャル地方のブラマプートラ河に架かる竹の吊り橋

ンド北部ウッタラーカンド州の研究学園都市ルールキーの中央建築研究所に客員研究員として滞在し、天空輝度(空の明るさ)の測定や研究をしていたので、インド各地の町や村を訪れ、インド・ヒマラヤの探査などをした。そして78年、日本ヒマラヤ協会隊の隊長としてカシミールのヌン(7135m)に登山し、日本人として初めてその頂上に立った。

そのころ、日本ヒマラヤ協会はラダックのレーに前線基地のあったインドチベット国境警察隊(Indo Tibet Border Police, ITBP)と交流があり、外国隊は入域禁止だった東部カラコルムの山にITBPとの合同登山隊として特別の登山許可を取得することができた。

東部カラコルムのアッパー・シャイヨーク川(Upper Shyok River)とヌブラ谷(Nubra Valley)に挟まれている地域にサセール・カンリ山群(Saser Muztagh)、クムダン・マモストン(Mamostong Kangri)山群、リモ(Rimo Muztagh)山群などがあり、リモⅠ峰(7385m)を最高峰として、7000m級の未踏の約20座の山々が林立している。

日本ヒマラヤ協会に所属していた私が日本側の隊長となり、ITBPとの合同登山隊として85年にサセール・カンリ(SaserKangri)Ⅱ峰(7513m)、尾形好雄さんが日本側の隊長となり84年にマモストン・カンリ(Mamostong Kangri)Ⅰ峰(7516m)、88年にリモ(Rimo)Ⅰ峰にそれぞれ初登頂した。

その後、中印国境に近いパンゴン湖(Pangong Tso, 標高4300m)の南側に位置するパンゴン山脈(Pangong Range)の山々に登山許可を取得することができ、栃木県山岳連盟(隊長・沖允人)がマリ峰(Mari, 6585m)に初登頂し、日本山岳会石川支部(隊長・西島錬太郎)がパルマ・カンリ(Barma Kangri, 約6500m)の初登頂、名古屋の中京山岳会(隊長・沖允人)がスパミック(Spangmik, 約6250m)の初登頂を果たした。2024年には、日本山岳会東海支部隊(総隊長・沖允人、隊長・星一男)がメラック(Merak, 6481m)に初登頂した。

ハリッシュ・カパディアさん(左)と筆者

さらにインド・ヒマラヤの各地

を探査し、カシミールのコラホイ（５４４０ｍ）に登頂、そして、ガルワール・ヒマラヤのニルンタ（６５９６ｍ）、ナンダ・デヴィ東峰（７４３４ｍ）などを数年かけて踏査した。また、インド・ヒマラヤの最東端で、ブータン王国国境に近いアルナーチャル地方の各地を、日本人として初めて数年にわたって探査した。この地方の民族の生活は大変興味深く、家や橋の造りも独特だった。

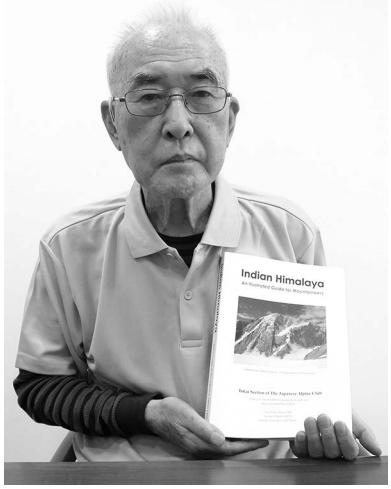
このような経験のある私が、インド・ヒマラヤ登山の成果をまとめる本の編集を手伝うことになったのである。

『インド・ヒマラヤ』日本語版と英語版を同時出版

１年ほどかかって『インド・ヒマラヤ』（初版）を２０１５年に、京都のナカニシヤ出版から刊行することができた。約30名のインド・ヒマラヤ登山の経験者に協力してもらい、東部カラコルムからシッキム、アルナーチャルまでの16の山域の山々の解説や登山史をまとめることができた。これによって17年、日本山岳協会（当時）から第６回「日本山岳賞グランプリ」を授与された。

その後、22年に改訂版を名古屋の風媒社から出版した。このときインド人の編集者Harish KapadiaとKankan Kumar Rayを加えて、英語版も出版した。

さらに、25年９月に名古屋のカミヤマ社から再改訂版を出版した。このとき英語版も改訂増補版を同時に出版した。インド・ヒマラヤに重点を置いた著書は日本では最初であり、世界でも最初である。類書がなく、世界的にも高く評価される本となった。



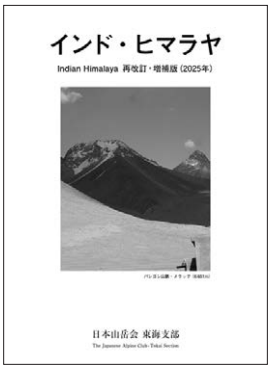
英語版の初版を手にする筆者

『インド・ヒマラヤ』日本語版

インド・ヒマラヤ山脈は、東部カラコルム山脈からヤルンツァンポ川の大きな湾曲部にかけて広がり、標高６０００ｍを超える約５０００座の山々を含んでいる。これらの山を13の山域に分類し、さらにそのうちの約８００座を山域とグループに分類した。そして、各山域の主な山のカラー・グラビア写真48ページを挿入し、各山域の概念図を掲載した。個々の山名解説・山容写真・登山記録に加え、登山に関する人文・社会科学的な側面も簡潔に記述した。

巻末に各山域の主要文献リスト10ページを掲載し、詳細な山名索引を付した。

Ｂ５判、４２３ページ、ソフトカバー、限定50部、定価１万６０００円（消費税・送料込み）日本山岳会会員価格６０００円（消費税・送料込み）　発行：日本山岳会東海支部／編集者：沖允人、星一雄／発行元：カミヤマ㈱（名古屋市）

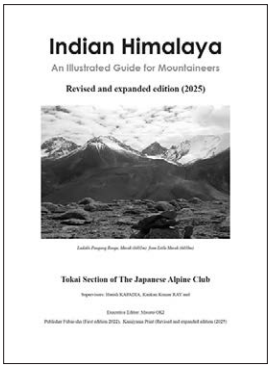


日本語版『インド・ヒマラヤ』

『インド・ヒマラヤ』英語版

Ｂ５判、４００ページ、ソフトカバー、限定30部、定価１万円（外国人向け：１００US$、消費税・送料込み）付録のＣＤにはこれまでのインド・ヒマラヤ登山隊の１６２４～２０２５年の登山の簡易概要（２８０ページ）が収録してある。発行：日本山岳会東海支部／監修：Harish Kapadia, Kankan Kumar Ray／発行元：カミヤマ㈱（名古屋市）／連絡先（受取人住所）・受取銀行は日本語版に同じ。

連絡先（受取人住所）：〒４６８－００５１　名古屋市天白区植田３－８０１－１　ボンセジュール植田４１８室　沖允人
Ｅメール：35oki@ymail.ne.jp
受取銀行：三菱ＵＦＪ銀行鳴子支店（２９９）　普通口座・沖允人
受取人口座番号：0184323 BIC（SWIFTコード）：BOTKJPJT



英語版『Indian Himalaya』

REPORT

現役学生だけで登山隊を編成 ピサン・ピーク全員登頂

立教大学山岳部　門倉　樂

学生だけで計画から実施へ

本遠征は、立教大学体育会山岳部による海外遠征として、ネパール・アンナプルナ山群に位置するピサン・ピーク（６０９１ｍ）を目標に、２０２５年10月３日から27日にかけて実施された。隊員は学部４年生の堀川菜々子、関根完史、学部３年生の門倉樂、武井樹、佐藤仁美の計５名で、いずれも学部３・４年生の現役学生のみで構成された。計画立案から遠征準備、実施に至るまでの全工程を学生が主体となって遂行した。

悪路をヘッドバンクしながらジープでチャーメへ

本遠征の実施に当たっては、多くの立教大学山岳部ＯＢ・ＯＧの方々より寄付を賜ったほか、日本山岳会による令和７年度海外登山助成の承認ならびに助成金の支援をいただいた。この場を借りて、関係各位に心より感謝申し上げたい。

今回の遠征隊が発足したのは、遠征の約２年前に当たる23年秋ごろである。当部では、23年３月にもネパール・ヒマラヤにおいて学生主体の海外遠征を実施しており、その遠征に１年生として参加していた堀川を中心に、当時１・２年生であった部員の間で新たなヒマラヤ遠征の構想が立ち上がった。かく言う私自身も、入部して１年に満たない時期であったが、先輩方のヒマラヤ遠征の報告を聞いて以来、強い憧れを抱いており、迷うことなく遠征隊への参加を希望した。

核心となる5600m付近のもろい岩壁。落石に注意しながら登る

メンバー決定後は、ピーク選定、現地エージェントとの交渉、大学との連携など着々と準備を進め、計画は徐々に具体化していった。そうしてあっという間に時は過ぎ去り、25年10月３日、私たちは成田空港を出発し、無事にネパールへと到着した。

カトマンズを発ちＢＣへ

カトマンズにて２日間の準備期間を設けた後、バスでベシサハールへ移動し、さらにジープでチャーメまで進んだ。そこから徒歩で、ピサン・ピークの麓に位置するピサン村へと入った。これら準備および移動の期間に大きなトラブルは発生せず、ネパールの異国情緒溢れる街並みや文化、車窓から望める桁違いのスケールの岩壁や滝に圧倒されながら行動を進めた。

頂上へと抜ける雪稜を登る。緊張感と安堵感が同時に湧き上がる

ピサン村での１日の休養日を挟み10月10日、私たちはＢＣ（４３８０ｍ地点）に到着した。遠征開始から７日目、カトマンズを離れてからはわずか４日後のことであった。ＢＣ周辺はヤクの糞（通称ヤク・パンケーキ）が広範囲に散乱しており、糞に注意して歩くのを初日で諦めてしまうほどであった。また、ピサン村以降ピサン・ピークの反対方向にはアンナプルナⅡ峰北壁を望むことができ、標高を上げるほどにその圧倒的なスケール

に威圧され、心が躍った。

なお、本遠征ではJanakChuli Treks Pvt. Ltd.にエージェント業務を依頼した。日本語でのコミュニケーションが可能であり、ロッジや移動手段の手配からBC・HCでのテント設営、アタック時のガイド、ルート工作に至るまで、多岐にわたる支援を受けることができた。特にBCでの食事はとてもすばらしく、白米（日本米の）に味噌汁、蕎麦と日本食まで用意してくれた。

５人全員で頂上に立てた喜びがクライマックスに。バックはアンナプルナⅡ峰

BCからHC、そしてアタック

入念な高度順応によりひどい高度障害が出る者もおらず、遠征11日目となる10月14日、HC（５１００ｍ地点）に到達した。そして翌15日、アタックを開始。５４００ｍまでは危険箇所はなく、ひたすらガレ場を詰めた。

５４００ｍ以降は残置のフィックス・ロープとともに、ルートの核心部となるもろい岩壁が５９００ｍほどまで続く。岩質は想定以上にもろく、今にも剥がれ落ちそうな、もろい一枚岩が連続して重なり合うような構造をしていた。スラブ状の面で手掛かり、足掛かりが乏しい箇所もあったが、フィックス・ロープを頼りにユマーリングでひたすら高度を稼いでいく。途中から落石の危険を考慮し、隊員間の間隔を空けて行動したが、初めての高所登山ということもあり、ペースは思うように上がらなかった。

頭痛と息切れに耐えながら、一歩一歩確実に高度を上げ、岩稜帯を抜ける。そこからは約２００ｍの簡単な雪稜を通過し、ついに10月15日11時50分ごろ、隊員５名全員でピサン・ピークの山頂に立つことができた。全員で頂上に立ったその瞬間だけは、息切れも頭痛も忘れ、安堵感と喜びで胸がいっぱいになったことを今でも鮮明に覚えている。

その後、10回以上の懸垂下降を済まして17時ごろ、BCへと帰幕することができた。

遠征を終えて

今回の遠征は、トレッキング・ピークを目指し、クライミング・シェルパを雇っての登攀という形になり、登山の内容だけを見れば今時珍しくもなく、技術的な困難さや未知を伴うものではなかったと評価されると思う。しかし、大学山岳部の現役部員だけで構成された隊で、海外遠征における計画、準備、実施といった一連の過程を学生が主体となって担い、このような結果を残せたことは大きく、意義のあることだと私たちは考えている。

今後の立教大学山岳部にとって、海外遠征が常に目指すべき目標であるとは限らない。しかし、もし海外遠征を志すのであれば、金銭面、学業や就職活動との両立、大学側との連携など、大学山岳部ならではの課題が必然的に浮かび上がるだろう。その意味で、今回の遠征は一つの例、経験として重要な意味を持つのではないだろうか。

さらに、山岳部での活動がより高く、より困難を志向していくのであれば、おのずと海外遠征へと目は向いていくだろう。その際、本遠征の経験がヒマラヤへの扉を開き、後に続く部員たちの背中を押す存在となることを願っている。私たち自身も、本遠征の約２年半前に実施された当部の２０２３年ヒマラヤ遠征から強い影響を受けた。１枚の新人歓迎用のビラに写ったヒマラヤに立つ隊員の写真は、私たちにヒマラヤへの憧れと挑戦する勇気を与えてくれた。

結びに当たり、本遠征の実施に際し、多大なるご支援、ご協力を賜った全ての方々に、改めて深く感謝申し上げたい。

著者、自著を語る

山歩きを始めて50年 私家版『山岳展望図集　１５０山』を上梓

佐古清隆

展望図作りのきっかけ 広角度の展望図を作りたくなる

私が「山頂からの展望図」を描画し始めたのは、30年ほど前だった。書籍に掲載されていた山岳展望図を眺めていて、その収録角度に物足りなさを感じた。ここで気合が入り、自分なりの「広角をカバーした展望図」を作ってみるしかないと思い立った。過去にパノラマ的に撮っていた写真を点検すると、カットとカットの間が連続していないケースや稜線が雲に隠れているケースもあり、撮り直すしかなかった。

写真撮影を終えて帰宅するたびに、写真をなぞって描画した。展望図の数は増えていったが、いつしか熱意が薄れて、20年ほど放置したままだった。数年前、身辺整理の際にふと「カタチにして残しておきたい」という気持ちになり、２０２３年、『山岳展望図集　１５０山』として手作り製本した。

展望向きの天候・時刻 展望写真は好天候が第一

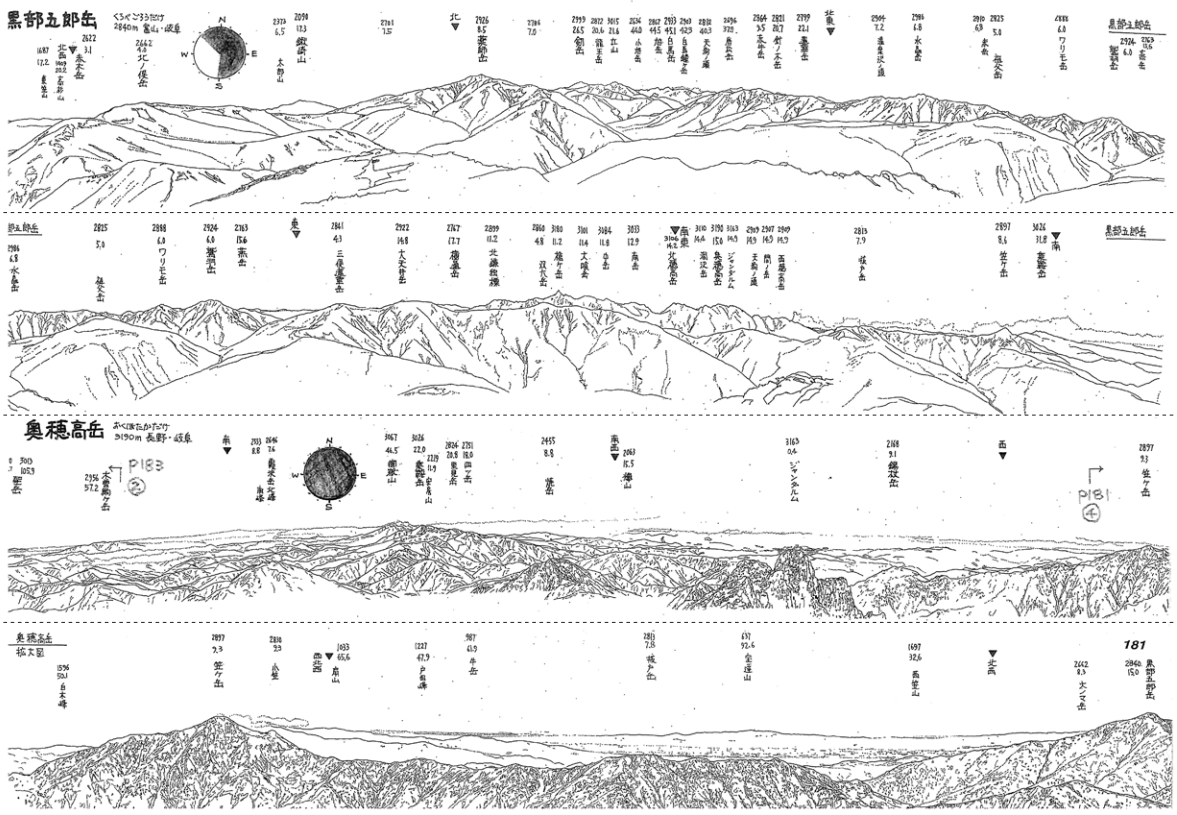
現地での撮影には好天候を選びたい。東京在住の私としては、近辺の山での山岳展望の好機は「秋から早春」と言える（5～6月や夏の期間でも、好展望に恵まれるケースもある）。

冬型気圧配置が強過ぎると、関東平野側の低山は晴天であっても、上越方面や日光・尾瀬方面の稜線は雪雲に隠れがちだ。冬型が崩れて移動性高気圧に覆われそうなときをねらう。

撮影時刻は空気が澄んでいて 太陽光が強くなる時間帯をねらう

近郊の「日帰りの山」の場合はできるだけ早朝に出かけて、息せき切って登った。山頂に到着してみると、すでに山頂で休んでいた登山者から「さっきまで見えていたのですけどねぇ」と気の毒がられたこともあった。

写真撮影は10時ごろまでに終え



ることが多かった。遠望の山は空気が白濁し鮮明度が薄れるケースがあり、その時間帯までに撮り終えたかった。

太陽光の強度は大切な要素だ。日の出から2時間ぐらい経過して太陽光が強くなるのを待つ。日の出直後の横からの光線は弱いうえ、逆光の方角は山肌がシルエットになるなど、画面が平板でメリハリに欠ける。その時点で不満足な状態であれば午後まで待つか、再訪する。

山頂到着に時間がかかる山（たとえば丹沢・蛭ヶ岳など）は、前夜、小田急電車の最終便に乗り、塔ノ岳・丹沢山経由で夜間歩行したら、蛭ヶ岳からは穂高連峰、乗鞍岳の先端部が見えた。

「天候待ち」としては、槍ヶ岳山荘では3連泊、同じ北アルプス・笠ヶ岳ではテントで3連泊した。再訪する際の時間・費用を考えると、「現地で粘ること」に躊躇はなかった。

余禄――夏山最盛期の7月最終週の槍ヶ岳では、6時半から8時過ぎまで誰もいない山頂を経験し、思わず笑みがこぼれて「ヤリでニヤリ」状態になった。槍ヶ岳山荘に宿泊した登山者たちはご来光を眺めて出発した後だし、別の山から新たに到着する登山者もいなかったのだった。槍ヶ岳からの展望図完成後に調べると、日本百名山のうち50山が確認できた。

展望図作りのノウハウ

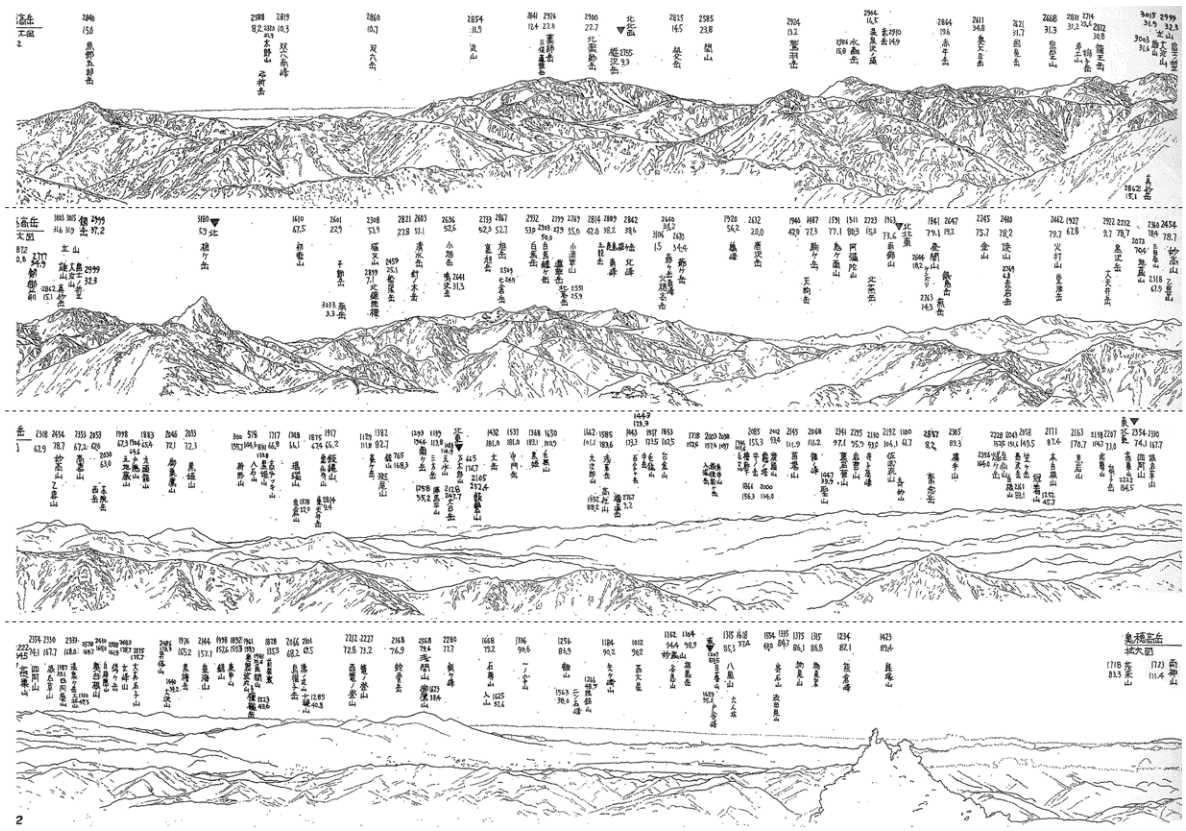
【レンズ・撮影地点の移動】＝樹木などを避けながら撮りつなぐ（以下、35㎜判カメラ使用時）

遠望の山は200㎜の望遠レンズで撮った。三脚は必携だった。画面両端の部分は隣のカットと重複させて撮るため、合計53～55カットが必要だ。周囲に遠望の山がない場合は、標準レンズ（50㎜前後）使用だと十数カットで済む。

山頂によっては、樹林に邪魔されて遠望が利かない角度がある。その場合は、枝の透き間を探して頂上付近を歩き回って撮った（ただし、移動地点が離れ過ぎると遠方の山と前山との「稜線の重なり」にズレが生じて「描画後の貼り合わせ段階」で接続しづらい）。

【描画の手順】＝映写機で投影した画像を水性ペンでなぞる

私の場合、リバーサル・フィルム（スライド用フィルム）で撮って



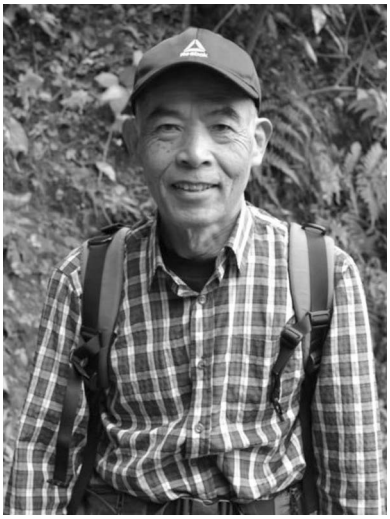
いたため、映写機でA3用紙に投影して、その映像を水性ペンでなぞることにした。ただし、展望図用には尾根線のスカイラインだけで十分なケースが多く、「長辺を活かしたA3用紙の半分」で事足りる。

【描画の連結】＝描画を25％に縮小コピーして貼り合わせる

1山55カットほどのカットの描画には、合計十数時間を要する。描画後、25％に縮小コピーして貼り合わせる。整理の都合を考えて、上下7・5㎝、左右42㎝ほどの形（A3用紙の長辺を活かして4段に分割した大きさ）で保存した。なお、現地でこの展望図の両端を持って手を伸ばすと実際の景色とほぼ重なって眺めることができる。

【山名・標高・距離表示】＝山座同定のために山名データを追加入力

展望図には、山名に加えて標高、その山までの距離を付記した。山座同定（山名判定）では、当初は地図上に線を引いたりしながら四苦八苦していたが、パソコン・ソフト「カシミール」を利用することで作業が楽になった。内装されている「山名データ」だけでは判明できず、それを補うために新規に2500山ほどのデータを追加した。


筆者近影

私家版『山岳展望図集　150山』の内容紹介と自己紹介

A4判・本文248ページ・未公刊。日本山岳会図書室には寄贈済み。

【収録内容】

◇奥多摩・奥武蔵・奥秩父周辺＝高尾山、雲取山、甲武信ヶ岳、金峰山など48山

◇箱根・伊豆半島・丹沢・富士山周辺＝箱根駒ヶ岳、蛭ヶ岳、三ツ峠山など31山

◇静岡・南アルプス周辺＝浜石岳、北岳、塩見岳、赤石岳など17山

◇八ヶ岳・中央アルプス周辺＝赤岳、蓼科山、霧ヶ峰、美ヶ原、木曽駒ヶ岳など17山

◇北アルプス＝奥穂高岳、槍ヶ岳、立山、剱岳、白馬岳など16山

◇上信越・東北・北海道＝妙高山、男体山、燧ヶ岳、八甲田大岳など21山

◇見本展望図の方位

⑴黒部五郎岳（6ページ上2段）／北西→南（約135度）

⑵奥穂高岳（広角図、6ページ3段目）／南南東→西北西（約130度）

⑶奥穂高岳（拡大図、6ページ4段目・7ページ1～4段目）／西→南南東（約110度）

＊⑵右端の笠ヶ岳は次段左端につながる。

【自己紹介】

1946年、香川県琴平町生まれ。長野県松本市周辺の双体道祖神に魅かれて山麓歩きを繰り返しているうち、周囲に見える山々に登ってみたくなり、75年5月、「山登り」を意識して歩き始める。79年8月には、中部山岳地帯の縦走路を主体にして、太平洋岸の御幸ノ浜（神奈川県小田原市）から日本海の親不知海岸（新潟県）までを歩きつないだ（28回、延べ56日）。いつしか「富士山を展望した山」の数が223（フジサン）を超えて、「フジサンから富士山を見た」ことに満足感を得た。

【主な著書】（いずれも山と溪谷社刊）

『ひとりぼっちの山歩き』（1987年）。『ひとりぼっちの日本百名山』（1988年、2023年に文庫化）。『山岳展望ハンドブック』（2巻で40山からの展望図収録、2000年）。『富士の見える山ベストコース』（2003年）（のちに『富士山の見える山ベストコース』に改題）

『山岳』第121年の原稿募集

本会の機関誌『山岳』第百二十一年（2026年）の発刊は本年9月の予定ですが、「記録」「調査・研究」「紀行・読物」などの幅広い分野で、ぜひ会員の皆様方からのご投稿をお待ちしております。締め切りは5月下旬。

なお、採否につきましては、恐縮ですが編集委員会に一任させてください。手書き原稿でも結構ですが、できれば下記宛メールでご投稿をお願い申し上げます。

〒123-0852東京都足立区関原三丁目25-3　久保田賢次

☎090-3402-6988　✉gama331202@gmail.com

（『山岳』編集委員会）

NEW MEMBER

登山YouTuberと登山ガイド、二足の草鞋で山へ

松波果穂

こんにちは！　登山YouTuberの「かほ」と申します。歴史ある日本山岳会の一員になれたこと、とても嬉しく感じています。

昨今、「YouTuberってなんだ？」と思う方は少なくなってきているかもしれません。しかしながら、その存在が得体の知れないものだということは心得ておりますので、私の経験や活動についてお話しさせていただきます。

２０１９年10月に会社勤めをしながらYouTubeチャンネル「かほの登山日記」を開設し、翌年３月から独立し、専業YouTuberとなり今に至ります。YouTuberとは一体なんなのか？　簡単に言えば「YouTubeを生業にしている人」です。「儲かるんですか？」とか「どうやって稼いでいるんですか？」とあからさまな質問をしてくる人はいないのですが、どうやって生計を立てているのかと疑問に思う方も少なくないでしょう。私の収入源はYouTubeに動画を公開することで得られる収益や、企業とのタイアップやイベント出演などのギャランティです。たまに雑誌に寄稿して原稿料をいただくこともあります。

アコンカグア山頂で近藤謙司さん、現地ガイドと筆者(左から)

私が作る動画は百名山や低山を中心とした自身の登山の様子を写しているもので、冒険家や探検家のような大それたものではありません。個人の些細な山日記をネットに公開し利益を得ているとは自分でも不思議に思いますが、「そういう時代である」ということなのでしょうか。

私の行動範囲は百名山や低山が主だと記しましたが、ときにはバリエーション・ルートや海外の高山にチャレンジすることもあります。２０２３年にアコンカグアやマナスル、24年にはマッターホルンにも登ってきました。両親からは「どうしてそんな危険な場所にわざわざ行くんだ？」と言われますが、私にもなぜ自分がそんな場所に出かけるのか分かりません。

海外の高所登山はお金も掛かります。マナスルでは、およそ４００万円の費用をコツコツと貯金した蓄えの中から支払いました。そこそこの車が買える金額を払ってまで海外登山に出かける理由を私はうまく表現できません。しかし、私の感情をあえて文字にするならば、ランチにふと食べたいものが頭に浮かぶのと同じように、私は本能的に高山に挑戦してみたいと感じたのです。

バリエーション・ルートや海外遠征では、山岳ガイドや国際山岳ガイドと行動をともにしています。南米大陸最高峰のアコンカグアに登頂したときは、近藤謙司さん(国際山岳ガイド)と一緒でした。私は山頂の数百ｍ手前で体力的にも精神的にも限界がきて「もう無理だ。下山したい」と近藤さんに伝えました。すると近藤さんは「もうちょっとだから、頑張るよ」と励ましながら山頂に導いてくれました。私は歩きながら「もうちょっとって言ったのに、全然着かないじゃないか！」なんて思っていたのですが……(笑)。近藤さんと一緒だったからこそ登れた山だったと、感謝してもしきれません。

多くの山行でガイドと接するなかで、自分にとってガイドという存在が憧れとなりました。そして、自身でもゲストを案内してみたいという気持ちが芽生え、25年春に日本山岳ガイド協会の登山ガイドステージⅡを取得しました。会社員をしていたころの自分には、YouTuberや山のガイドになることなんて想像もできなかったでしょう。行動一つで人生はいかようにも変化しうるのだな、と実感しています。日本山岳会の一員になれたこともその延長線上にあるご縁だと感じています。これまで先人が積み重ねてきた知見と文化を学びながら、発信と現場の双方から山と真摯に向き合っていきたいと考えています。

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

⑸7『西蔵旅行記』上・下（河口慧海著・博文館）

松田宏也

河口慧海（えかい）という名を聞いた方は多いだろうが、その業績をすらすらと答えられる人は少ないだろう。今回再読し、改めてその偉大さに脱帽することになる。最初に読んだのは、今から40年以上も前のこと。中国のミニヤ・コンカで遭難し、九死に一生を得て帰国、病院のベッドでやるせない日々を送っていたときのことだ。時間はたっぷりとあったので片っ端から本を読んだ。そのうちの一冊だ。

深田久弥が後書きで「この偉大な人物について、今までに語られることがあまりに少なすぎた。理解するには偉大すぎたのかもしれない」と書いているが、そのとおりだと私も思う。岳人たちの海外の高峰を求める気持ちのあり方に、この本は大いなる刺激を与えてくれる。

明治37（1904）年初版発行

平易で読みやすい仏教の経文を社会に提供したいという考えに端を発し、サンスクリット語の原書がなくなったインドではなく、チベット（西蔵）語に訳された経文の研究をするがためだけに、チベット行きを決心し、日本人として初めて入国を果たしたのである。

明治30（1897）年、32歳の慧海は念願を果たすべく、まずは神戸港からインドに向かう。インドでチベット語の学習をするためだ。1年半後には中国人僧になりすましし、ネパールからヒマラヤ越えを果たすのであるが、なんと日本を出てチベット国境に入るまでに3年の年月を要したのである。

そして、チベット領のマナサロワール湖から最終目的地のラサに向かうのであるが、よくぞ生きてヒマラヤを越えたものだと感心するばかりである。朝にお茶と干しブドウなどの乾燥食品を食べ、昼に麦焦（むぎこ）がしを茶碗に2杯、バターとトウガラシを付け食べるのみ、1日1食である。泥棒に遭い金と食料を盗られたり、氷河で溺れそうになったり、雪目（雪眼炎）になったりと、命からがらの探検であった。およそ40㎞／1日歩き、寒さと飢えをしのぎつつヒマラヤの景色に感動しながらラサを目指す姿は、異様ですらある。あるときは短歌を詠み、心を慰めて喜んでいる。「雪の原雪の蓐（しとね）の雪枕　雪をくらひつユキになやめる」

慧海の執念が救いをもたらしたものかと思うところが何ヶ所もあるが、仏をひたすら信じ、それが慧海をラサに導こうとする様が素直に描かれている。ようやくラサに着いてからは、どういう訳か大学に入り、腕の良い医者となる。その名声のお陰でダライ・ラマや大蔵大臣にも面会、その他の知遇を得ていくのであるが、慧海の人格が変わることはない。相も変わらぬ経典研究の僧侶である。

その著の後半では、チベット文化について詳しく書かれている。多夫一妻制、結婚の決め方、婚礼の奇習、さらし者と拷問、驚くべき鳥葬の実情、輪廻転生、軍隊、なぜ体を拭かず不潔に見えるのか等々、その時代のチベット文化を知る上では第一級の史料である。

その後、中国僧へのなりすましがばれそうになるも、間一髪ラサを後にし、ネパールを経てインドのダージリンへ向かう。その後数ヶ月、チスター熱で倒れ療養するも、ラサでの恩人である大蔵大臣ほかが投獄され非情な責苦に遭っているとの話を聴き、恩人救出のためネパールに向かい、ネパール国王にダライ・ラマ法王への上書を直訴し、提出を依頼するのである。やがて明治36年、カルカッタから神戸港へと帰国の途につく。長い長いチベット探検の終わりである。その後はチベット研究者として、ヒマラヤを目指す岳人たちの道しるべとなったのである。

今回読んだ『チベット旅行記』は白水社版だが、文庫本では5巻ものの講談社学術文庫版や、抄本だが中公文庫版など多数ある。

（図書委員会委員）

⑸『山の眼玉』（畦地梅太郎著・朋文堂）

萩原浩司

畦地梅太郎の名前を知らなくても、この表紙を見れば「ああ、あの絵の……」と、ほとんどの人が思い出すことだろう。

今から10年ほど前、畦地梅太郎作品の、ちょっとしたブームが起きた。きっかけの一つは２０１４年、畦地梅太郎版画集『山男』が、没後15周年企画として山と溪谷社から出されたことによる。Ｂ６判という小型サイズに代表作76点が収録されて、畦地作品のカタログ的な存在として多くの人の目にとまった。

また同年、雑誌『岳人』の発行元が登山用具メーカー・モンベルのグループ会社に代わったことを機に誌面が刷新。畦地の版画が表紙を飾るようになる。

さらに同年９月に復刊されて大ヒットとなった伊藤正一著『定本・黒部の山賊』のカバーに、初版同様、畦地作品が採用される。そして、このころから山小屋で販売するTシャツなどでも畦地作品が使われるようになる。それが若い人、特に女性に受けた。

昭和32（1957）年初版発行

なかでも人気を集めたのが「山男」シリーズである。あるときは胸にライチョウを抱き、あるときはザイルを首に掛け、ときには叫び、ときには横になってくつろぐ「山男」。単純な線で描かれた男の顔は、表情に乏しいように見えて、黒目がちの大きな目がどことなく人の良さと優しさを感じさせる。少し前の若者言葉でいうところの「ジワる」――じっくり見るにつれて、ジワジワとその良さが後を引くように感じられる作品、と言えるだろう。

「山男」については、版画家の大谷一良が『山の眼玉』（平凡社ライブラリー版）の中で次の解説文を寄せている。

《畦地さんといえば〈山男〉というほどだが、やがて「風景では自分を表現するのに頼りなくなって」、風景が、人物である〈山男〉に移っていく。最初の〈山男〉は、青いセーター姿で煙草とコップを持った男で、一九五三年に生まれた。以後、数多くの〈山男〉が誕生していった。〈山男〉は、畦地さんではないかという、多くの人の疑問に、畦地さんはこう答える。「里の生活から抜け出して山のひとときを楽しんでいる人間の姿、それが〈山男〉じゃと思うてもらえば一番いい」》

その「山男」を函表紙にした画文集『山の眼玉』は１９５７（昭和32）年に朋文堂から刊行された。郷里である愛媛の山々や奥秩父、北アルプスなどの山行を綴った47編に及ぶ紀行随想集である。

「山男」の作風同様、収められた文章は簡潔で気取りがなく、数々のほのぼのとしたエピソードが込められている。そして、添えられた絵がまた内容にふさわしく、優しくて、温たかい。

「ウドを食う」は、戦後間もなくのころ、空腹を抱えたまま浅間山方面を散策し、ウドを見つけてほろ苦い思いでそれを食べた話。下山先の食堂で、ふたりで４人分の飯を食べながら「あとまだ二人前も食えたらなあ」などと思ったりするシーン。大きく口を開けて丼をかっ込むふたりの挿絵がほほえましい。

「失敗した借金」では、山旅の途中で資金が尽きて旧友に借金を頼みに行くのだが、相手の貧困を目にして逆に有り金全てを貸すことになってしまう。そして、一夜の宿を乞うこともできずに野宿する羽目に。それでも、腕時計を金に替えればいいと自分を納得させ、「借金をしに行って金をおいてきたことが、なにか愉快なことに思えておかしかった」などと綴る。

総じてあまりにも人間臭く、ほのぼのとした文章と挿画は、「山男」の版画同様に読者に親しみを感じさせ、読んで、見て、楽しい画文集となっている。

本書に挿入された絵や版画の良さを味わうには、朋文堂版の初版に勝るものはないが、絶版となり古書店でも入手が難しい。代わりに今では「山男シリーズ」などの版画のカラー口絵を巻頭に載せたヤマケイ文庫版（２０１３年初版発行、税込み１０４５円）で読むことができる。

（図書委員会委員）

N
西
東
北
南
S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

サラリーマン女子、4回目のエクアドル登山〈上〉

石川 千嘉

２０２２年11月に初めて訪れ、最高峰チンボラソ（６２６８ｍ）ほか４座登頂以来、毎年のようにエクアドルを訪れ、メジャーな山はほとんど登ってきた。友人も多くでき（私は当該プログラムには参加していないが）、19～23年の交流登山で来日したピチンチャ山岳会のメンバーとも一緒に遊びに行ったり、食事会に呼ばれたりする仲となった。

今回はエクアドル最難関峰と言われるエル・アルタル（５３１９ｍ）をターゲットに、ほか未登の４座を登ることにした。

エクアドル着の飛行機は、主に深夜となる。今回は珍しく遅延がなく、定刻どおりの夜１時半に空港着。ホテルに入って仮眠をとり、朝、早速友人と市内観光に繰り出す。この友人は以前、アンティサナを登った際にベースキャンプで出会った女性で、以来親しくしているが、こういった出会いがあるのも山の楽しみである。

２日目にシンチョラグア（４８７３ｍ）に向かう。５０００ｍ程度までなら順応なしに登れるのだが、今回は到着２日目にいきなりこの標高で最後の１ピッチは簡単なロッククライミング、しかも霧雨が降り始め、ぬれた岩場はなかなかきついが無事に登頂。３日目はセロ・プンタス（４３３７ｍ）に登る。この山はまるで八海山のような岩稜が続く山で、距離は長いが草原から岩場まで色々な風景が楽しめる山である。

続いて南に移動し、４、５日目は小屋泊でカリウアイラソ（５０１８ｍ）を目指す。この山はコンディションによって難易度が大きく変わる山であるが、当日は雪で覆われアックスが効きづらい状態で、急斜面のトラバースや70度程度傾斜が混じったマルチピッチのクライミングとなり、スキル向上にはもってこいの状態だった。山頂はめったに晴れることがないと言われるが今回は雲一つない快晴で、チンボラソやサンガイなど、エクアドルの名峰が３６０度楽しめる最高の登山となった。

カリウアイラソ4900m付近から望む最高峰チンボラソ

温泉保養地バニョスで一度体をリセット。赤道直下にあるエクアドルでは、標高２０００ｍの地でもジャングルに近い植生を示し、様々な鳥や動物、昆虫を見ることができる。登山の合間にそんな楽しみがあるのもエクアドルの魅力である。

エクアドルの甲斐駒、といった趣だろうか、超急登と長距離を誇るトゥングラウア（５０２３ｍ）は登山口駐車場から高低差２３００ｍ、往復距離20㎞強である。つい数年前まで噴火していた活火山は、登り口は泥、小屋を過ぎるあたりから火山灰と礫に覆われ大変登りづらい山である。夕方、小屋に到着すると快晴で、眼前には堂々たるエクアドル最高峰チンボラソ、眼下にはアンバトの街が美しく輝き、風光明媚極まる。

翌日深夜２時に出発。しかしながら天候が急激に変わり始め、濃霧から強風となる。標高が高く気温が低いため、霧は細かい氷の粒となり、強風に乗って顔を打つ。間もなく霧は暴風雪となり始めた。この季節のエクアドルで風が強いのは想定内ではあるが、砂礫の急登は体力を奪われる。結果、山頂まであと標高差１００ｍ程度であったが、下山のリスクを考慮し、登頂を断念する。

〈以下次号に続く〉

山は爽やかにして人もまた
―マナスル初登頂から70年、槇有恒の功績―

小原 茂延

今年はマナスル初登頂から70周年を迎える。近代登山がウォルター・ウエストン師と小島烏水・岡野金次郎との邂逅によって幕を開いた明治後期から急速に発展したとはいえ、ヨーロッパ・アルプスにおける近代登山の技術に比して、旧来の富士講や御嶽講などが全体の流れであった時代に、近代アルピニズムの潮流であるクライミング登山の到来は、槇有恒によるアイガー東山稜の初登攀とともにもたらされ、その技術と山道具などは目を見張るものであった。

一昨年ある講演会で会った元役員H氏に、槇有恒の出身地である宮城支部で、記念登山や顕彰の動きがあり、同支部が活動を起こしたことに期待している、と話したところ、H氏が言うには、「でも、槇さんは元々越後長岡の人である由とか……」との言葉が返ってきたのには唖然とした。それは私が「会報」886号の東西南北欄に書いた槇さんの父親のこと、と口に出かかったものの「そうです」とのみ応じた。おそらく自分で読んでいないことは明白で、他人から伝え聞いたものであろう。いずれにしても、槇の出身(生誕地)は仙台市である。

槇有恒は1894(明治27)年に仙台市北七番町で生まれた。父の武は慶應義塾を出て当時、仙台で奥羽日日新聞の主筆、母の千年は小学校の教員をしていた。幼いうちは神戸・京都で過ごしたりしていたが、小学校4年のとき、父の東京転勤に際し学校を転々とするのは良くないという両親の考えから、兄の智雄とともに生地である仙台の叔父宅に預けられた。宮城師範附属小から旧制仙台二中へと進み、北山、伊勢堂山、国見峠周辺など奥羽山脈の麓で遊び親しんでおり、とりわけ仙台西郊の泉ヶ岳を懐かしみ、その著『私の山旅』の中で当時は山裾の根白石(ねのしろいし)に1泊して行かねばならない静かな山であった、と振り返っている。

1913(大正2)年に慶應義塾法学部に入学、翌年には本会に入会して上高地から前穂高岳、針ノ木岳越え、立山、劔岳に登っている。15年に慶應義塾内に山岳会を設立、会長の鹿子木(かのこぎ)員信(かずのぶ)教授の薫陶を受けている。卒業後、渡米してコロンビア大留学も翌1919年、渡欧して大英博物館に遊学、W・ウェストン師の知遇を受けてスイスに渡り、勧められたグリンデルワルトに滞在。本場アルプスの登山技術の習得に励み、21(大正10)年9月9日、アイガー東山稜の初登攀を成し遂げ「ヘル マキ」と称えられた。

帰国後は最新のクライミング技術を伝えることに努め、槍ヶ岳冬季初登頂、松尾峠における遭難で同行の板倉勝宣の死という試練を越え、25年にはカナディアン・ロッキーの難峰アルバータに遠征して初登頂（昨年100周年記念式典）に成功。さらに56年、日本山岳会第3次マナスル登山隊隊長として5月9日、11日の初登頂に導いた。仙台市名誉市民、文化功労者の栄誉に輝いている。

その心情を「山を尊び　山を愛し　山と共に生く」と記している。これは鹿島槍ヶ岳に登る登山者にこよなく愛され「鹿島のおばば」と慕われた狩野(かのう)きく能(のう)さんの顕彰碑に乞われて認(したた)めた言葉である。

(資料映像委員会委員　埼玉支部)

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行クラブ――
紅葉の乳頭山から秋田駒ヶ岳

10月10日に乳頭温泉郷・黒湯の自炊棟に前泊し、11～12日に岩手県と秋田県にまたがる広大な火山帯の秋を満喫する山旅を実施した。参加者は、宮城支部1、埼玉支部2、東京支部1、東京多摩支部5、千葉支部1、岐阜支部1、東九州支部4名の総勢15名である。黒湯では、食材を持ち寄って作ったきりたんぽ鍋を囲み、和やかに酌み交わしながら懇親を深めた。

電子版 会報「山」への登録のお願い

会報のカラー版を電子版でお送りしています。発送費削減のためにご協力をお願いいたします。電子版を登録しても通知（メール）や電子版が来なかった方は迷惑メールなどを確認のうえ、再度登録をお願いいたします。

不明な点は、デジタルメディア委員会（internet@jac.or.jp）にお問合せください。

【電子版への登録】↓
https://jac1.or.jp/kaiin/20250401135272.html

1日目は、孫六湯登山口（814m）から登山を開始した。黄色から赤に色づいたブナ林は美しいシンフォニーを奏でているようである。標高1100mを超えたあたりから、アオモリトドマツとブナの混合林になった。登山道は、雨水によって深くえぐられ、通過に手間どった。田代平からは展望の開けた尾根道を感嘆の声を上げながらたどり、乳頭山頂上（1478m）に到着した。

稜線から頂上にかけ、岩手山、姫神山、早池峰山、秋田駒ヶ岳山群、鳥海山、田沢湖、森吉山から八幡平、白神山地や岩木山などの北東北の山々がぐるりと見渡された。しかし、頂上まで3時間40分を要し、最終バスに間に合わないおそれがあり、当初の駒ヶ岳八合目まで縦走計画を変更し、元来た道を引き返した。

孫六湯登山口から20分下った乳頭蟹場温泉からバスに乗り込み、田沢高原ホテルに到着した。ロビーには石油ストーブがたかれ、文字どおり温かく迎えられた。ここは水沢温泉からお湯を引いている。黒湯が白濁した硫黄泉だったのに対し、青く透き通ったカルシウム硫酸塩泉（石膏泉）である。食卓に着くと、並べられた料理にぬくもりが感じられた。

2日目は、バスで駒ヶ岳八合目（1304m）へ向かい、霧雨の中、登山を開始したが、展望がほとんどなかった。草原を登っていくと、ミネカエデがぎっしりと生えているが、ほとんど落葉していた。しかし、男女岳と男岳の谷間に入ると、木道の両側に色とりどりの草紅葉が広がっていた。阿弥陀池の縁を巡り、阿弥陀池避難小屋に到着した。雨足が強くなったので、希望者のみが男女岳（1637m）に登った。天候回復の兆しが見えないので、元来た道をたどり、早めに下山した。駒ヶ岳八合目避難小屋からバスでアルパこまくさへ下り、解散した。

両日とも計画どおりのコースを歩くことができなかったが、北東北の山々の美しい秋を満喫した。黒湯での自炊も含め、思い出に残る山旅だった。

（宮城支部・八尾寛）

図書紹介

清水敏一著
大雪山研究と開発のパイオニア　大雪山調査会

2025年3月
北海道出版企画センター
A5判　270ページ
3600円＋税

北海道で最も著名な山と言えば大雪山、誰しもが認めることであろう。私も初めて登った北海道の山は旭岳温泉から層雲峡温泉までの表大雪縦走路であった。残された自然の美しさと残雪とのコントラスト、なんといっても本州の山と比べて登山者が圧倒的に少ないことに魅せられた。その後、しばし北海道通いが続き、正確には数えてないが、北海道百名山には80近く登ったのではないかと思う。

本書は北海道東川町在住の山岳史家で、同町が大雪山文化の伝承に取り組む「大雪山アーカイブス」の専門員をされていた清水敏一氏の遺稿が集められたもの。同氏は長年にわたって大雪山に関する調査研究を行なっていたが、202

3年3月に逝去されている。同氏のパソコンに残されていた未発表原稿が収録されており、大雪山調査会創立100周年記念誌出版委員会が編集に当たった。収集された資料を基に、大雪山の調査研究と観光開発の礎を築いた「大雪山調査会」についての記録がまとめられている。

当会は1924年（大正13年）に「大雪山およびその連嶺に関する調査研究」を目的として設立された。その活動は講演会や展覧会の開催、関連書籍の出版、絵葉書の作成など多岐にわたり、会の役員は会長の荒井初一を始め層雲峡を中心とする財界の重鎮で占められていた。

本書の中で、最も興味を惹かれるのは、21年の塩屋忠による大町桂月の層雲峡への誘致である。塩屋は新聞記者で、のちに理事として会の発足に携わり、現在の層雲峡温泉の経営者でもあった。桂月は文豪として全国に知られた名士であり、彼のペンの力を借りて層雲峡と温泉の売り込みを図るため、大雪山登山のため来道し現・天人峡温泉から旭岳に登頂する予定であった桂月を説き伏せ、層雲峡から人跡未踏であった黒岳沢を登らせることに成功した。このとき、桂月は「層雲峡」の名付け親となり、最初に登頂した無名峰が彼の没後に「桂月岳」と命名された。

なお、大雪山系には「桂月岳」のほかにも「間宮岳」（探検家・間宮林蔵）や「松田岳」（探検家・松田市太郎）など、人名から命名された山が多いが、「荒井岳」は実業家で当会創立者の荒井初一、「小泉岳」は当会設立主意書を起草した小泉秀雄から命名されている。

桂月一行は桂月岳登頂後に旭岳に縦走し、遭難騒ぎがあったものの無事に下山し、登山記「層雲峡より大雪山へ」が『中央公論』に掲載され、層雲峡と大雪山が全国的に知られることとなった。

本書にはこのほか、清水氏の未発表原稿など数点が収録されている。本書は、単なる大雪山の調査研究と観光開発を綴った歴史書ではなく、清水氏の生涯の業績が詰まった、パイオニア精神を次世代に伝える貴重な資料であると思う。

（木根康行）

寄附金および助成金などの受入報告
（令和7年11月まで）

寄附者など	受入金額など（単位千円）	寄附の目的、その他
日向　祥剛　会員	300	「北九州支部ルーム」の運営資金

登山家・冒険家になるには
神長幹雄著

2025年9月
ぺりかん社
B6判　166ページ
1600円＋税

本書は、山や未知の世界に挑むことを志す人たちに向けた、具体的かつ現実的な指針を提示するキャリア・ガイドとも言うべき本であり、また「冒険とは何か」という問いに自分なりの答えを見つけるための本でもあると私は思った。本著に登場するのは、山や冒険の世界で活躍し、自己実現してきた方々である。それも、クライマー、アドベンチャー・スキーヤー、探検家・作家、フォトグラファーなど、様々な経歴の方々の視点が記されている。そのような第一線で活躍するプロのインタビューを通じて、冒険家・探検家になるために必要な技術、体力、危機管理能力、心構えについて、実践的なアドバイスがまとめられている。

また、冒険・探検を生業とするための多様なアプローチを本書では提示している。それは、本書で登場する方々の経歴を見ても分かるが、冒険・探検に対するアプローチは多種多様である。冒険・探検はそうしなければならないという具体的なルールはない。冒険に必要なのは自分のモラルや倫理観、感性や思考であると、本書のインタビューに答えた倉上慶大氏は語っている。人によって感性や思考は異なるのだから、多種多様な冒険の形があって当然であろう。そのような形が認められた世界で自己実現を達成した彼らの物語から、本書の読者は自分の冒険とは何かを考えるヒントを得ることができるであろう。

また、本書では登山家・冒険家の世界とはどのようなものかを丁寧に掘り下げている。初登頂や「地図の空白部分」や極点への初到達を目指す時代の終焉、国家の威信を懸けての組織的登山から個のスタイルを追求する時代への移り変わり、そして、グローバル化やG

PSの普及により冒険・探検がどのように変遷していったかその歴史を分かりやすくまとめ、GPSなどの科学技術が進歩して、この時代における価値ある冒険とは何か、冒険の現代的な意義とは何かを本書では考察している。加えて、冒険家の体力と経験の相関関係から、見えない壁である「43歳の壁」を多くの冒険家・探検家が意識し直面している事例、冒険はそもそも無償の行為と考えられており冒険家が職業として成立しづらいが故にセカンド・キャリア（2番目の職業）が重要であることなど、冒険家・探検家の職業としてのリアルが記されている。

本書は自らの興味を仕事にすることの厳しさと喜びの両方が記されている。登山や冒険に憧れのある人はもちろん、「自分らしい生き方」を探す人にも読んでほしい一冊であると感じた。

（吉羽悠介）

会務報告

令和7年度第9回（12月度）理事会議事録

日時　令和7年12月11日㈭　19時～22時18分

場所　集会室およびzoom（オンライン）

【出席者】橋本会長、飯田・永田・柏各副会長、原田・猿渡・荒川各常務理事、望月・池田・吉田・大塚・片山・武川各理事、石川・額賀各監事、（オンライン参加）梅田・根本各理事

【欠席】なし

【オブザーバー】原会報編集委員、長島事務局長（書記）

【審議事項】

1・令和8年度事業計画および予算の策定手順について（片山、猿

【山岳会のヒトとモノ】講座 第5回『ナムチャ・バルワ初登頂』開催のお知らせ

今回のテーマは、「ナムチャ・バルワ初登頂」です。

当時、未踏の世界最高峰だったナムチャ・バルワ（7782m）に、日中合同隊が2回にわたり挑みました。映像と写真、トークで困難だった登攀を振り返ります。

ナムチャ・バルワは、東チベットのヤルンツァンポ川大屈曲点に位置し、天候の悪い山として有名です。1991年の1次隊は、悪天候と多量の降雪に阻まれ、大西宏隊員の雪崩事故、山頂直下での流雪などにより撤退を余儀なくされました。

これを受けて、92年の2次隊では気象や雪崩対策にも力を入れて、ナムチャ・バルワに再挑戦しました。しかし、前半では悪天候と多量の降雪に悩まされ一度撤退。再度のアタックでは、2mの雪下に埋没したテントや装備を掘り出しての登山を強いられました。それでも日中双方の隊員は不屈の精神で再アタックをかけ、懸垂氷河でのビバークの末、ようやく未踏の最高峰に登頂することができました。

当時の初登頂、特に7000mの高峰での初登頂や探検登山なども含め、お話しいただきます。

今回もできれば、何人かの隊員に参集いただき、当時の思いを語ってもらおうと思います。

■日時：3月16日㈪　18時30分～20時30分

■場所：日本山岳会ルーム104室およびリモート開催

■方法：104室で対面の講演会を行ない、併せてリモート（Zoom）で配信

■講師（ナビゲーター）：谷山宏典氏（ライター、日本山岳会）、古野淳氏（前日本山岳会会長）

協力者：重廣恒夫氏（日本中国ナムチャバルワ合同登山隊　登山隊長）

■参加方法：事前の申込みは行ないません。以下のどちらかでご参加ください。

①会場での聴講希望の方：日本山岳会ルーム104室に直接お越しください。18時から受付を開始します。なお、先着順で定員は35名までです。

②リモート参加希望の方：3月9日㈪から山岳会ホームページ上でZoomのURLを公開します。各自のPCなどで入室してください。18時から入室できるようにします。

■問合せ：資料映像委員会（飯田）☎090-4683-2305、記念事業委員会エベレストPJ（神長）☎090-4124-1082

主催：公益社団法人日本山岳会資料映像委員会・記念事業委員会エベレストPJ

渡）（賛成16、反対０）

審議の結果、財務改善の検討のため予算編成会議を行なうことが決定された。

2・令和８年度予算額について（片山、猿渡）（賛成16、反対０）

審議の結果、令和８年度の予算要求額において前年度比20％の削減を要請し、寄附金に頼らずにバランスの取れる予算を作成することが決まった。

3・創立１２０周年記念式典に掛かる費用について（柏）

費用を寄附金から使用することについて承認した。（柏）（賛成16、反対０）

【協議事項】

1・評議員懇談会（11月19日）で寄せられた意見について（原田）

時間がなく、具体的な検討はできず、今後の課題として検討することになった。

2・創立１２０周年記念行事について（柏）

ウェルカム・パーティ（12月５日）、創立１２０周年記念講演会・式典・晩餐会（12月６日）、記念・交流登山（高尾山・12月７日）について反省点など各理事から意見を聞いた。

3・支部役員懇談会（12月６日）について（原田）

支部から寄せられた意見について話し合った。

4・財務状況の把握とその改善策について（片山）

財務担当理事からデータを基にこのままでは財政破綻するという説明があった。

5・賛助会員制度に関する提案について（大塚）

次回までに細部を詰めて検討することになった。

6・準会員制度の見直しについて（原田）

情報を整理している、という説明があった。

【報告事項】

1・入会承認報告（橋本）

正会員８名　準会員４名の入会報告があった。

2・退会者報告（事務局）

物故会員 ６名（永年会員 ４名、通常会員２名）退会 ７名の報告があった

3・寄附（猿渡）

11月の寄附はなかった。

4・全国ボランティア支援登山集会（柏）

11月15日東海支部で開催された集会の報告があった。

5・埼玉支部設立15周年記念講演会の報告（柏）

6・内閣府行政担当からの指導について（猿渡）

提出した書類を修正の上、提出した。

7・山岳祭冊子『引き継ごう山岳祭』が完成の報告（柏）

8・第11回ロングトレイルシンポジウムの名義後援（原田）

名義後援をする旨、報告があった。

9・「ドルポ―西ネパール高地のチベット世界」の名義後援（原田）

３月12日～６月16日開催の企画展に対し名義後援する旨、報告があった。

10・支部連絡会議について（原田）

12月17日開催の支部連絡会議の準備について確認した。

【その他】

「山」11月号の進捗状況について

事務局連絡

ルーム日誌　12月

1日　総務委員会　記念事業委員会（山岳古道調査）　国際交流ＰＪ

2日　広報委員会　アルピニズムクラブ

3日　総務委員会　アルバータ峰登頂１００周年ＰＪ　山行クラブ

4日　常務理事会　ＹＯＵＴＨＣＬＵＢ委員会　山岳地理クラブ

5日　総務委員会　学生部

8日　アルパインスキークラブ　山遊会

9日　ＹＯＵＴＨＣＬＵＢ委員会

10日　財務委員会　かっぱの会

11日　理事会

12日　図書委員会

15日　総務委員会

16日　麗山会　バックカントリークラブ

17日　支部連絡会　東京支部　三水会

18日　科学委員会　東京支部（茶話会）　みちのり山の会

19日　自然保護委員会　クニ塾

20日　アルピニズムクラブ

22日　総務委員会（グッズ）　緑爽会

23日　アルピニズムクラブ　平日

クラブ
24日　子どもと登山委員会　YOUTH　CLUB委員会
12月来室者　313名

会員異動

物故

高橋　正（5434）　25・11・26
小西　奎二（7897）23・8・5
瀧沢ちよ子（10348）25・9・27
千田早苗（7211）　25・12・28

退会

羽田英彦（7112）　関西
藤原　健（7501）
川村　宏（9797）　関西
古閑栄子（14301）
加藤由美子（15389）福井
野口　徹（16566）　東京多摩
小池清次郎（16738）東京多摩
瀬崎暢子（17026）京都・滋賀
加藤　剛（17035）　千葉
岡部　紘（13101）　千葉
牟田泰三（13914）　広島
瀧口かおる（A0491）信濃
村長紀幸（A0495）　広島
北川佐季子（A0643）

INFORMATION　インフォメーション

◆第35回「山好きの山の絵展」アルパインスケッチクラブ

この展覧会は、日本山岳会の中のスケッチや絵が好きな仲間の絵展です。毎年多くの方がご来場くださり、ご好評をいただいております。皆様のご来場をお待ち申し上げます。

場所　有楽町交通会館B1F　ゴールドサロン　☎03-5962-9944

会期　2月15日(日)～21日(土)　10～18時（初日は12時から、最終日は16時30分まで）

入場無料

＊B1F　エメラルドルームにて「山を愛した人生　杉田博　白寿展」を同時開催。

◆杉田博　白寿展「山を愛した人生」

会期　2月15日(日)～21日(土)
時間　15日(日)　12～16時　16日―21日　11～16時
会場　東京都交通会館B1F　エメラルドルーム
問合せ　杉田博白寿展企画委員会　☎080-4782-6849（杉田ゆき子）

◆四国八十八ヶ所歩き遍路①　順打ち1国徳島参り

山行クラブ

四国八十八ヶ所1200㎞を春秋4回の区切り打ち（1年間）で歩きます。初回は徳島県の1番札所霊山寺から23番薬王寺まで順打ち。経験豊富な四国八十八ヶ所霊場会公認権大先達が遍路・巡拝・服装などの作法はお教えします。遍路用品は1番札所での購入もできます。

日程　3月13日(金)～21日(土)　8泊9日
集合　13日(金)　JR徳島駅改札口7時。夜行バスで朝着あるいは前日徳島泊。
行程　13日＝1番霊山寺―6番安楽寺（泊）　14日＝11番藤井寺（泊）　15日＝12番焼山寺（泊）　16日＝17番井戸寺（泊）　17日＝19番立江寺（泊）　18日＝22番平等寺（泊）　19日＝23番薬王寺（泊）　20日＝鯖大師―海部（泊）　21日＝甲浦（解散）
歩程　1日20～30㎞（健脚向き）
費用　参加費1万円（通信費、写真代等などその都度精算、賽銭、納経、昼食代）、傷害保険は各自お掛けください。遍路用品は約2万円。別途往復交通費。
定員　8名（先着順）
申込み　3月6日(金)まで　数見（すみ）直　☎090-7204-4668　✉sumi88t@gmail.com

訂正

＊創立120周年記念事業「引き継がれる山岳祭」PJの冊子『引き継ごう山岳祭』に誤りがありました。76ページの小島烏水の生年表記「1873年」が「1973年」になっていました。関係の皆様に深くお詫びいたしますとともに、訂正いたします。

（『引き継ごう山岳祭』編集委員会）

図書受入報告（2025年12月）

著　　者	書　　名	頁／サイズ	発　行　者	発行年	寄贈／購入別
アンドリ・スナイル・マグナソン／朱位昌併 訳	氷河が融けゆく国・アイスランドの物語	319p／19cm	青土社	2025	出版社寄贈
エミリー・フォースバーグ／キリアン・ジョルネ 写真／児島修 訳	走ること、生きること：強く、幸福で、バランスのとれたランナーになるために	176p／25cm	青土社	2019	出版社寄贈
ジュリー＆サイモン・フリーマン 編／小野寺愛 訳	ランニング・ワイルド：世界至極のトレイル16章	256p／25cm	青土社	2025	出版社寄贈
羽根田治	山岳遭難の教訓:ドキュメント遭難/ヤマケイ文庫	320p／15cm	山と溪谷社	2026	出版社寄贈
宗像充	リニアは南アルプスをくぐり抜けることができるのか：リニア中央新幹線ダークツーリズムガイド/ヤマケイ新書	288p／18cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
笹川光平	85歳の闘い：キリマンジャロの山頂へ	224p／20cm	工作舎	2025	個人寄贈
吉川和之 編著	熊野古道・伊勢路 道中案内:伊勢から熊野三山まで222kmを詳細ガイド	80p／19cm	月兎舎	2025	著者寄贈
日本山岳会関西支部 編	関西登山史：日本山岳会関西支部設立90周年記念誌	284p／26cm	日本山岳会関西支部	2025	発行者寄贈
日本山岳会関西支部 編	関西支部県境縦走 踏査報告書	362p／26cm	日本山岳会関西支部	2025	発行者寄贈
「引き継ごう山岳祭」編集委員会 編著	引き継ごう 山岳祭：日本山岳会創立120周年記念出版	144p／21cm	日本山岳会	2025	発行者寄贈
加藤恒彦	低山彷徨も又楽し	184p／21cm	私家版	2025	著者寄贈
草川啓三	森のしずく　№3	112p／12cm	工房 森のしずく	2024	執筆者寄贈
草川啓三	森のしずく　№5	112p／12cm	工房 森のしずく	2025	執筆者寄贈

❖編集後記❖

●故郷の佐渡へ帰るため、上越新幹線は年に数回乗車しますが、いつも〝車窓展望登山〟を楽しんでいます。昨年の12月19日は移動高に覆われた絶好の展望日和で、筑波山に始まり男体山、日光白根山、赤城山、上州武尊山、谷川連峰と続き、国境の長いトンネルを抜けると巻機山、八海山、越後駒ヶ岳、守門岳、粟ヶ岳などが居並びます。●実家の冬支度をトンボ返りで終え、陽が傾いたころジェットフォイルで帰路につくと、斜光線の下、堂々たる飯豊・朝日連峰の先に優美な姿の月山を視認できました。さらにその北、粟島の黒い島影とともに見えた白い三角錐は、なんと鳥海山ではないですか。めったに出会えない僥倖（ぎょうこう）に、独りほくそ笑んでいたのでした。（節田重節）

日本山岳会会報　山　968号

2026年（令和8年）1月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　橋本しをり
編集人　節田重節
E-メール：jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社